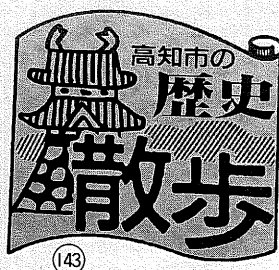


●県立高知西高等学校内の正門の近くにある兜木神社



朝倉合戦と兜木神社

かぶと き

広谷 喜十郎

土佐史研究家

朝倉城は、戦国時代に長宗我部氏と土佐中央部の覇権をめぐって争った本山氏の居城である。本山氏は、長岡郡本山にある本山城を拠点に勢力を伸ばし、やがて、土佐郡の山地を越えて南下し、「東は一宮を堺、西は二(仁)淀川、南は浦戸を限り二郡の主也。朝倉の城を居城に持つ」(『元親記』)といわれるまでになる。

さらに、天文九年(一五四〇年)には郡境の荒倉山を越え吾川郡弘岡の吉良城を奇襲して陥落させたり、仁淀川を渡って蓮

池城を攻略するなどして吾川郡や高岡郡へも進出している。本山氏は朝倉城を中心に、鴻ノ森、杓田、尾立、石立、鶴来、巢、神田、潮江、浦戸、長浜、秦泉寺城などを支配下に置き、土佐の中原にのみをきかせて、東の長宗我部氏と西の一条氏と対峙した。

長宗我部氏とは、激烈な戦いを繰り返して行い、永禄五年(一五六二年)にその興亡をかけての朝倉合戦が開始された。『土佐国編年紀事略』の九月十六日の条に「元親三千余兵を率シテ朝倉ノ城ヲ責テ敗北シ退テ神田ノ城ニ拠、吉良(本山)茂辰追テ是ヲ攻メ亦敗走シテ朝倉ノ城ニ退ク」とあるように、一進一退の激しい戦闘であった。

さらに「同十八日元親復朝倉ヲ攻ム、茂辰迎テ大ニ鴨部ニ戦フ」とあり、『土佐物語』には「天を響し地を動して攻戦ふ。

卯ノ刻より西の下まで卅余度の戦に、吉良(本山)一族廿三人、其外二百卅五人まで討たれければ岡豊方の討死五百十一人と記しける。互に続きて敵にも懸らず、暫く手負を助けて、元親は岡豊へ引退」とあるように、さまざまの戦闘を展開したのであった。中でも十六歳の本山親茂の奮戦ぶりは見事であったと『土佐物語』では伝えている。

『土佐物語』によると「鴨部の宮の前に馳向ひ、両方の鬨の声を上げ、火を散らして相戦ふ」とあるから、鴨部の郡頭神社付近から西高校あたりにかけて戦闘が行われ、多数の戦死者が出たので、地元民は兜塚をつくり供養していた。それが現在の兜木神社であるという。なお、翌六年正月に、本山氏は朝倉城を自焼して長岡郡本山へ退去している。